
双月の照らす世界譚～月夕の魔王～

月代 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双月の照らす世界譚〜月夕の魔王〜

【Nコード】

N3340J

【作者名】

月代 唯

【あらすじ】

二人の神の化身である二つの月の光が、闇の夜を照らしてくれる世界。そこでは魔法が使える人間は魔族と呼ばれ、人間の住む領土から迫害されていた。

―彼らは望む。自らの居場所を指し示してくれる、魔王の再誕を。そしてそれと時を同じくして、生きる意味を見失った青年「蔵本透樹」が謎の声に導かれてこの世界へやって来ようとしていた。

プロローグ

私達の世界の空には、いつも二つの月があった。

その月が二年に一度一つになると勇者が生まれ、百年に一度太陽を隠すと魔王が生まれるという。

これははるか昔から、この世界に伝わってきた予言だ。

百年前、この予言と同じように魔王が生まれ、勇者によって滅ぼされた。

そしてもうすぐ百年が経ち、きっとまた魔王が生まれるだろう。

だから、私はなんとしてでも魔王を見つけ出さなければならない。

きっとその魔王が、私達の希望になるから。

―東から昇る神と西から昇る女神

百年に一度、太陽を蝕むとき

世界から魔王が生まれるであろう

だが、二年に一度

二人の神が合わさる時に産まれた子ならば

魔王を滅ぼすことができるであろう

すべては夜を照らす、二人の神の思し召しなり―

一、暗黒の声

―もし、勇者が自分の為ではなく人の為に世界を救う存在ならば、俺は絶対に勇者にはなれないだろう。

RPGは、モンスターを倒して強くなったり、謎を解いて物語を進めていったりするから楽しい。だから、決してゲームの中の世界を救いたいという気持ちで戦っているわけではない。ゲームは所詮、ただの暇つぶしの遊びでしかない。

たった今、俺の目の前のテレビの画面の中で、魔王と勇者との闘いが繰り広げられていた。

魔王は、黒い鎧とマントを着て黒い剣を握っている。肌もどす黒いし、爪が凶器になりそうなほど鋭い。そしてその顔は・・・人のモノではなかった。見れば誰もが畏怖するような要素を存分に取り入れたその姿は、世界を悪に包み込む存在に相応しい。そして、これから勇者に倒される存在としても相応しかった。

対して俺の操作する勇者は、派手な赤いマントに黄金に輝く鎧に立派な剣を持っていた。勇者に憧れる子供から見ればその姿はとも格好良く映るかもしれないが、魔王に勇猛果敢に挑もうとしているこの勇者は、かつて弱いモンスターの中の代表であるスライムに勝つことさえやっとだったのだ。そこから世界を救うことが出来るほどの力を手に入れることなんて、常識から考えてまず在り得ない事だ。それこそ、死ぬほどの努力をしない限り。

確かに、勇者はゲームの中で何度か死んだ。―そして生き返った。徐々に強いモンスターを倒していった、魔王のもとまで辿りついたのだ。

魔王は、ラスボスなだけに今まで闘ってきた敵よりずっとデカイし強い。だが俺は、どのくらいまでレベルを上げれば楽にコイツに勝てるかを知っている。そして慣れた手つきでコントローラーを操作し、魔王に止めをさした。

「ふう……」

コントローラーを放り投げ、くらもととおき蔵本透樹は座っていたベッドにそのまま倒れこんだ。

ゲームをクリアしたという達成感を感じられなかった。実は、このゲームはもう8度も初めからやり直している。むしろ残ったのは大量の疲労感だ。良く考えてみると、夕食を食べ終えてから今の今までずっと休み無しでテレビゲームをやっていた気がする。

(……つまらないな)

最近、何をやっても面白く感じない。何をしようとしても、一向にやる気が出ない。

中学に居たときは、勉強がそれほどずば抜けている訳でもなく運動神経も平凡だった。だから高校も、レベルが低く落ちる心配が無い所を受験した。そんな時、ふと疑問に思ったのだ。何のためにこんなことをする必要があるのだろう、と。

何のために生きる必要があるのか分からない。そう気づいてしまっ

ただ。

―それから、何もかもが他人事のように思ってしまった、透樹は傍観者のように振舞うようになった。

何かを見ても感情を抱くことが少なくなり、傍からは冷徹な人間として見られていった。

時計はもうすでに1時をまわっている。明日は日曜だから遅く寝ても構わないのだが、透樹起きてても何もすることも無いのでそのまま寝ることにした。

だがその時、突然頭の中で誰かの声が鳴り響いた。

《ソノ前二ナニカ忘レテナイカ?》

「な・・・」

透樹は思わずベットから上半身を起こした。

周りには誰も居ない。聞こえた声は男のもののようにだったが、親父の声とは違っていた。

声の主が誰なのか。考えてもどうせ分からないだろうと思った透樹は、自分が一体何を忘れているのかの方を考えることにした。

学校からの課題は無かったはずだ。あっても多分、透樹はやらないだろうが。

風呂は夕食の前に入っだし、歯磨きは・・・してないけどそれを忘れるのは良くあることなんだが。

「・・・あ」

―思い出した。

確かゲームをしている最中に、携帯にメールが来たことを知らせる着信音が鳴っていた。だがその時透樹は、ゲームを中断するのが面倒だったのでメールを確認するのを後回しにしていた。

たかがメール如きにわざわざ声が頭に鳴り響くかどうかは謎だが、メールが来ること自体滅多に無い透樹はすぐさま携帯を持ってくるとメールを確認した。

「愁から・・・か」

牧原愁。^{まきはじょう}透樹の数少ない友の一人。いや、今はもう友であるのかは分からない。

なぜならば、彼が3ヶ月ほど前から不登校になって以来、会っても話してもいないからだ。

愁と透樹は、中学が同じだったのでそのことがきっかけで高校から良く話すようになった仲だ。だが愁は、高校に入ってからしばらくして何度もガラの悪そうな先輩に呼び出されるようになった。

一体彼らは、何のために愁を呼び出していたのか。それは、聞かなくても愁の様子を見ただけで大まかな察しはついた。愁は一言で言うなら下級生イジメを受けている。本人は気づいていなかったが、首の後ろに痣が残っていることがたまにあった。

だが、その時の透樹は既に冷徹な人間になりきってしまった後であり、何をしようとも愁の受けている虐めを止める事が出来ないということを知っていたため、透樹は何もしなかった。

それでもただ一つだけ、あいつに「悪いけど、俺はお前を虐めから助けることも庇うことも出来ない」という内容のメールを送った事がある。その時は「大丈夫」という返事が返ってきたが、それから

一週間もしないうちに愁は学校に来なくなった。愁からのメールもそれっきりだった。

そして今日、3ヶ月ぶりに愁から来たメール。そこには、「小遣い叩いて明日、少し遠出したいんだけど、一緒に来てくれないか？」と書かれていた。

「遠出・・・って、ずいぶん突拍子もない内容だな・・・」

透樹の知る限り、愁はそんなことをいきなり言い出すような奴ではない。

だが、彼の心の傷が少しでも癒えるのならば、遠出に行かせてやるのも悪くないのかもしれない。

そう思いながら透樹が返信ボタンを押そうとすると、ついさっき聞こえた声がまた頭の中で鳴り響いた。

《誘イヲ受ケロ》

「あーはいはい」

どうやら、謎の声が言う”忘れていること”とはメールの確認で正解だったらしく、その謎の声は透樹を愁の言う遠出に連れていかせたいらしい。普段は、あまり他人からの指図を受けない透樹だったが、なぜかこの声の命令を聞くことに悪い気はしなかった。

返信するメールの内容に了承の言葉を入れ送信すると、透樹は眠るために目を閉じた。

一、暗黒の声（後書き）

謎の声の主が一体誰なのかは、後々発覚する予定です。
まあ、察しの良い方は既に予想出来るかと思いますが（笑）

二、友人

なんだか、とても嫌な夢を見た気がする。

目が覚めると外はだいぶ明るくなっていたが、時計は9時半を指していた。昨日はゲームで少々夜更かししていたため普段ならばもう少し長く寝ているはずだった。

目覚ましもかけていない。まだ眠いし、もう少し寝るか・・・と透樹は再び目を閉じた。

《・・・携帯》

透樹はがばつと布団から飛び起きた。

そういえば昨日（時間的には今日だが）は、愁からの誘いのメールを承諾した後すぐに寝たんだった。

慌てて携帯を開くと、案の定愁からメールが来ていた。しかも、表示されている時間によると俺がメールを送ったすぐ後に来ている。ひょっとしたら愁は、俺のメールの返信が来るまでずっと寝ずに待っていたのだろうか。

・・・いや、さすがにそこまではないか。

ただ単に、愁は寝付けなかったのだろう。きっとそうだ。

メールには『11時に駅で待ってる』と書かれていた。

しかし、他に行き先とか持ち物とかお金についての必要な内容が一切入ってなかったから俺は困った。

「おいおい・・・一体俺は何を持っていけば良いんだよ・・・」

とりあえず適当に、財布に4万円ほど突っ込む。金さえあれば、と

りあえず大抵の問題はクリアできるだろう。

ついでに、最近肌寒くなってきたのでダンスからダウンジャケットを引っ張り出す。

・・・とりあえず、これならどこにでもいけそうな気がした。もちろん日本国内においてだが。

準備を終えてリビングに行くと、透樹の母親が透樹を見て目を丸くした。

「休日になのに早く起きるなんて珍しいわねえ」

「今日、愁と出かけてくる」

「愁君と？いつ帰ってくるの？」

「わかんねえけど、たぶん遅くなる」

愁が言うには遠出らしいので、ひょっとしたら今日中には帰ってこないかもしれない。

実際、愁の言う遠出とはどのくらいの遠出かは分からなかったため、その辺をぼかして答えた。

たぶん、母は遅くなるといっても今日中に帰ってくるだろうと思っているに違いない。

今日中に帰ってこなければ学校をサボることになるのだが、透樹はたまに親にばれない程度に2、3度学校をサボったことがあるので全く気にしなかった。

「ほんつとに悪いな。突然で」

駅に着くと、そこには既に愁が先に来ていた。

さすがに3ヶ月ぶりの愁は、記憶の中のいつも騒がしいほど元気な姿とは違つてだいぶやつれて見えた。

「別に構わねえけど、目的地は？」

「此处」

そう言つて愁は2枚の新幹線の乗車券を出し、その1枚を透樹に渡した。

そこに書かれた駅名は透樹にとっては見覚えの無い名前だった。

「駅名じゃわかんねえよ・・・っていうか何でもう2枚も切符を買つてんの？」

「俺が誘つておいてお前にお金を払わせるのはなんか悪いだろ？」

既に愁は2枚の乗車券を買った後だったので、俺は黙つてそれを受け取った。

新幹線に乗るのは初めてだった。俺は家族旅行とは無縁で暮らしていたからだ。

しかしそれは愁も同じだったようで、新幹線に乗るとあの頃と同じようにはしゃぎ出した。

「俺さ、一度新幹線に乗って箱根とかそついうところに旅するのやつてみたかつたんだよねー！」

「へえ、そりゃ良かったな」

なんとなく久しぶりで、俺の口元も緩んだ。そしてこの一瞬、愁と

の過去のわだかまりを忘れられそうな気がした。もちろん、そんなことは出来ないし心の中では分かっていたけど。俺と愁は指定された席に向かい合わせに座った。

「・・・俺の居ない間にさ、学校で変わったこととかあった？」

愁が突然、ぎこちなく聞いてきた。顔は笑っていたが、無理して明るくしようとしているのが見え見えた。

「いや、特になにもないな」

「え、ほんとに？透樹、彼女とか出来てたりとかしないの？」

「出来るわけねえだろ」

突然何を言い出すかと思えば、なぜか俺の彼女の有無についてだった。

愁はポリポリと頭を掻いた。

「あつれー、おつかしーなー。透樹なら出来てると思ったんだけどなー」

「その根拠は一体どこからだよ」

「前に加藤がさー、透樹のこと好きだって言ってたじゃん」

「いや、いつのことだよそれ。お前不登校だろ」

その加藤というヤツだって、俺は知らない。

「あれ、加藤じゃなくて佐藤だったかな？」

「それなら斉藤なんじゃないか？」

「あー！そうだよ、斉藤だよ！」

まあ、斉藤が俺にそういう素振りをした覚えは全くないけどな。

「でもさー。勿体無いよな。オレ達めちゃめちゃカツコイイのに彼女いないんだもんなー」

そういつて身を乗り出して俺の肩をポンポンと叩く愁。

そこに自分を入れるとはさすがだな。ついでに、男にカツコイイと言われても全く嬉しくない。

俺はため息を一つしてから、頬杖をついて窓の景色を眺めた。

いつのまにか町並みが少し変わっている。なんというか完全な田舎では無いけどコンビニが少し遠くて困りそうな感じだ。

「なんというかさ。透樹はこう・・・愛想笑いとかそういうの下手くそだよな」

横を向いて外を見ている俺の耳に愁の言葉が入ってくる。

「・・・お前も愛想笑いが下手になったな」

つい、さっきから思っていた本音を口にしてしまった。口に出してからしまった、と思った。

顔を正面に戻すと、口を半開きにして表情が固まってしまった愁がいた。

「・・・そうか・・・そうだよな・・・」

その後、新幹線の中で俺と愁は一言もしゃべらなかった。

二、友人（後書き）

遅くなってしまう、申し訳ありません。

キリをここまで！と決めたら、少し長くなっていました。
異世界へ行くまで、あと1話分の現実世界のお話があります。

三、湖

新幹線で約3時間（正確には2時間40分だけど）かかって、透樹たちは里のような場所にまで来てしまった。

「・・・で、どこだよこ」

「・・・田舎？」

愁が酷く曖昧な答えを返してくる。

あれか。目的地を良く分かって無いまま新幹線に俺を連れ込んでまで遠出したのかお前は。

「いや、田舎じゃねえだろ。どちらかと言えば観光地に近い雰囲気だろ」

「でもここ観光地じゃねえけど」

・・・そこは知ってるのかよ。

「でも田舎じゃなきゃどうやって表すんだよー」

「じゃあもう田舎でいいよ」

とりあえず、ここは田舎だということに決まった、らしい。

愁は自分の鞆から地図を取りだして、透樹について来いと言った。なんだ、地図を持っているということは既に下調べはしてたということか。

知らない振りをしやがって。くそう、騙された。

そんな風に透樹が悔しがっていると、愁は山道の方へ進んでいた。

遠出と言うより遠足のようになってきたみたいだ。ただし、透樹は遠足は嫌いだが。

それでも一応、ここまでついてきたついでなので透樹は少しだけ我慢することにした。

「透樹、ありがとな。何も聞かずにここまで付き添ってくれて」

足元に気を付けながら歩いていたら、愁が前方を向いたまま言った。それを見てやっと本音を出す気になったか、と透樹は溜め息をついた。

「で、そろそろ教えてくれるよな。何で遠出するなんて言い出したか」

「ああ・・・うん」

愁が気まずく頷いて、立ち止まった。辺りがしんと静かになる。ごくりと唾を飲み込んで、愁は少し震えた声で話し出した。

「透樹、オレさ・・・死のうと思う」

「・・・なんで？」

「分かってるよ。これは逃げなんだって。

人生なんてさ、苦しいこと一杯あるよな。人はそれを乗り越えて成長するもんなんだから

でもさ・・・オレ、逃げたくなっちゃったんだよ透樹」

「・・・そうか」

最初から透樹はそんな予感がしていた。愁は死に場所を探していたんじゃないかと。

透樹は別に愁に死んでほしい訳ではなかったが、それでも愁を止めるための言葉は言わなかった。いや言うことが出来なかった。

それを愁がこの3ヶ月間考えて決断したことならば、透樹が今こ
で何かを言っても無駄だからだ。

それに俺には愁を止める資格なんかないだろうし。

「でもさ、もし死ぬ直前になって、急に怖くなって死ねなかったら
さ、かつこわりいじゃん。だから、ちゃんと見張ってほしいって
いうか・死ねなかった時に殺してほしいっていうか・
・嫌だよな。そんなこと頼まれても」

そっいいながら、愁は力なく笑った。

多分、無理な願いだと思っっているんだろう。

愁は透樹がそれを断ることを覚悟していた。

「いいよ」

「・・・え？」

こんな返事が来るとは思っていなかったのだろう。愁は少し驚きを見せる。

透樹は真剣な目で愁をまっすぐ見た。

「お前が自分で死ねない時は、俺が殺してやる」

「ああ・・・ありがとう」

そして、二人はまた歩き出す・・・はずだった。

「・・・あれ？」

「どうした？」

愁は辺りを見渡して頭をぽりぽりとかいた。

「いや・・・なんか迷ったかも」

「はあ!？」

「いやーごめんごめん」

愁はそう言って両手を合わせて詫びの仕草をする。

先ほどまでは小幅のある道を歩いていたはずだったがその道が今では後ろを向いても見当たらなかった。

「いいよ別に」

とりあえず、今は何とかして道を探さなければいけない。もう一度よく見渡して見ると、透樹はかろうじて獣道になっている場所を見つけた。

「愁、ここは通れそうだ」

「あ、うん」

今度は透樹が先頭に立って歩いた。持ってきた地図はすでに見ることを諦めて仕舞っていた。

しばらくの間、木々の枝を掻き分けながら進んだ。ある程度歩くと、かすかに水流が聞こえてきた。

「なあ透樹、何か聞こえないか？」

「水の音のことか？それなら俺もだ」

とりあえず、音源を目指して歩く。木がなくなつて、ひらけた場所に大きな湖があった。

「おい愁。地図は？」

愁が地図を再び取り出す。透樹が覗き込むと、地図の中に湖を見つけた。

「ふえー、こんなところまで来てたのか」

愁が驚きの声をあげる。とりあえず、湖のお陰で帰り道はなんとかなりそうだが。

愁が屈伸をしながら、透樹に提案した。

「歩き疲れたし、ここで少し休もうぜ」

「・・・っ！」

「どうした？」

透樹が頭を押さえたのを見て、愁が尋ねた。

「・・・いや・・・何でもない」

透樹は必死で何でもないように取り繕った。

愁には言いたくはない。言っただとしても、頭がおかしくなっているとは思われないだろうから。

また”声”が聞こえたのだ。昨日から、聞こえている誰だか分からない男の声が。

透樹は、自分を落ち着かせるために息を吐いた。

「愁・・・お前って確か泳げなかったよな」

「え？ああ・・・うん」

記憶の中にある、体育の授業のことを思い出して透樹は愁に尋ねた。ちなみに、透樹自身も泳ぎはあまり得意な方ではない。

「・・・湖に飛び込んでみるか」
「ええ!?!」

愁が仰天して声を上げる。泳げないのだから、その反応は当たり前か。

「や、やめようぜー。オレ絶対溺れて死ぬから!」
「お前は自殺しに来たんじゃなかったのかよ」
「・・・あ」

そういえばそうだったーと愁が笑う。
おいおい、こんな感じでお前は本当に死ねるのかよ・・・と透樹は少し気落ちする。

「まあ、とりあえずー」
「・・・え?」

愁が自分の背負っていたリュックを地面に下ろして透樹の腕を掴んだ。

その掴む力は外すのを絶対に許さないと言つかのように強く、透樹は思わず愁の顔を見る。

愁の顔は、彼のものだとは思えないほど無表情で冷たかった。
そして愁は湖に歩み寄り、透樹を掴んだまま思い切り飛び込んだ。

透樹は、その時”さあ、おいで”という言葉聞いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340j/>

双月の照らす世界譚～月夕の魔王～

2011年12月19日21時46分発行